

ルーツを探る ---「経の峰墓地」に眠るのは---

高谷 徹

1、はじめに

長崎市内「経の峰墓地」には浦上村山里の庄屋高谷家の墓地があると紹介されてきた。



高谷家墓地（経の峰墓地）

私は現在群馬県に居住しているが、蓮の台座に乗った屋根付き墓石が8体並ぶこの墓地に畏敬の念を感じながら墓参りしてきた。亡き父の故郷長崎の墓地を調べることで我がルーツが明らか

なると思ひ一念発起したのである。

2、アクション

令和元年(2019)3月、まだ桜町にあった長崎市役所での戸籍調べからスタート。我が墓地の在処は、市の墓地台帳によると「経の峰墓地」であると。墓守をお願いしている市内在住の従姉妹から聞く伯母の話は、明治初期鬻を切るため高谷家に集まった農民の話など興味深いものばかりだった。また長崎歴史文化博物館で見つけた高谷重治氏による「庄屋は今でも御船蔵町にあります」(「長崎談叢第46輯」の随想「浦上山里村」)の記述が妙に気になった。ネット検索は遅々としていたが少しずつ庄屋名がわかる事件など見つけ、墓碑にその名がないか1面ずつ舐めるように探した。しかし、墓碑は全体的に経年劣化が目立ち読み取りに限界を感じていた。そこで「拓本」取りを思いつき即実行に移した。

令和元年5月、墓碑だけでなく墓地周辺の写真も撮り込み坂本小学校を起点とした写真付き地図で墓地までの道順を残した。その時、墓地付近の広い更地に(連絡先 御船蔵町〇番〇号 高谷)の看板が二つあることに気付いた。

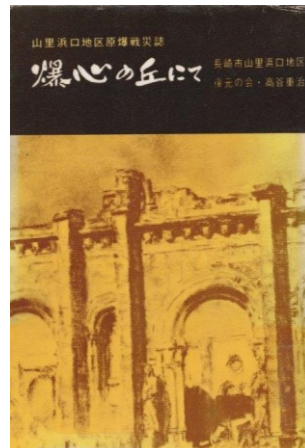
同年7月には三人の姉兄に封書で今年始めた我が家のルーツ探しの件を報告した。すると10月、ロサンゼルス在住の長姉が突然帰国、長崎への墓参りも果たし一緒に拓本取りにも興じた。

令和5年(2023)3月、令和2年(2020)年明けからのコロナ大流行で果たせなかった墳墓使用者変更手続きをようやく墓地管理者宅で済ませ、『御船蔵町』をキーワードとして気になっていた二つのこと【墓地付近の看板と「庄屋は今でも御船蔵町にあります」】を解決するため、再び行動を始めることにした。

3、ターニングポイント

NTT西日本の電話帳からようやく見つけ連絡をとった相手は、なんと庄屋高谷家の末裔だった。庄屋

高谷家の墓地の在処を尋ねると、以前は看板の場所にあったが墓じまいし聖徳寺に納骨したと答えた。【「経の峰墓地」にある墓は庄屋高谷家の墓地ではないことが判明】詳しい話をもっと聞きたいと申し入れたが、健康を理由に、後日娘と名乗る女性から断わりが入った。庄屋高谷家の墓地でないのだから『高谷家由緒書』(長崎歴史文化博物館蔵)に出てくる庄屋名が墓碑にないのは当然と合点がいった。しかし、「経の峰墓地」の墓地に誰が眠っているのかを知る切り札を失い「ルーツ探しはこれまでか」と途方に暮れながら長崎の町を後にした。



『爆心の丘にて』

同年7月、調査続行に行き詰まりを感じつつ何気なく読み始めた高谷重治著『爆心の丘にて』が「経の峰墓地」の墓地の謎を解き明かしてくれた。記述によると庄屋高谷家の三人の兄弟がある時期からそれぞれ「庄屋の高谷」「長店の高谷」「角の高谷」を名乗るようになり、「長店の高谷」の初代当主が宝暦6年(1756)70歳で没した「高谷正三郎」であり、それを記した家系図が手許にあるという

のだ。「経の峰墓地」には「高谷正三郎」の名を刻んだ墓碑があり我が家には同様の記載のある古びた『過去帳』が残されている。以上のことから、庄屋高谷家の墓地と紹介されてきた「経の峰墓地」にある墓地は「長店の高谷家」の墓地であることが明らかとなった。

4、おわりに

墓地の主が判明し私のルーツ探しは終了する。一族が浦上村山里の何処で何を生業としていたかを知るには資料があまりに少なく謎のままであるのが心残りである。時と共に史実も墓石も風化し続け、やがて歴史の中に埋もれてしまうのだろう。

最後に、協力いただいた多くの方々へ感謝したい。

本稿は、令和6年9月例会の発表要旨である。

参考文献

高谷重治「浦上山里村」『長崎談叢第46輯』長崎史談会 1967年

高谷重治『爆心の丘にて』長崎の証言委員会 1972年

『高谷家由緒書』長崎歴史文化博物館蔵
『高谷家過去帳』高谷家所有